坂口安吾「白痴」論

安蒜貴子

Ⅰ　先行研究

坂口安吾が昭和二十一年六月に『新潮』に発表した「白痴」は、同年四月同じく『新潮』に掲載された「堕落論」に基づいて書かれた作品[注1]とされている。

「白痴」論の中で最も古いものとされ、また非常に有名なのが、発表当初の平野謙の〈傑作になりそこねた力作[注2]〉という判断である。主人公の伊沢が、〈卑小な俗世間〉の中にあって〈白痴の女〉に出会い、そこに〈生の情熱を託すに足る真実〉を見出すが、結局作品最後で伊沢は〈明日の希望〉を掴むことはできない。〈明日の希望〉は〈陳腐〉であり、〈問題は空転し、そもそもの出発点から後退している〉という主旨である。〈出発点〉からの〈後退〉とは、作品にとって〈明日の希望〉が存在しない事は前提であり、その中で伊沢が〈明日の希望〉を見つけられないのは当然であるとするものだ。以後の「白痴」論は、この論に沿い、大きく分けて三点を確認しながら展開されていく。主人公である伊沢が住んでいる〈世間〉とはどういう場所か、〈白痴の女〉とはどういった存在で、その女との生活とは何か、そして、結末をどう捉えればよいのか、という点である。特に結末に関しては〈明日の希望〉の有無や〈明日の希望〉とは何か、について様々に論じられている。

こういった「白痴」論の形を変化させたのが、昭和六十年に発表された花田俊典「「白痴」評釈[注3]」である。花田氏は、そもそも「白痴」が「堕落論」の小説化であるという前提自体に疑問を投げかけ、二作品が〈不可分〉の関係であるとしながらも、「堕落論」以外の作品と「白痴」との関わりに言及していく。そして〈明日の希望〉に関しても、これまでと異なる読み方を提示している。これは〈明日の希望〉という言葉そのものが作品の問題点ではないとするもので、これによって「白痴」は〈傑作になりそこねた〉作品から一つの完成した作品へと変化する。氏は、「白痴」が〈知識人たる伊沢の〈敗北〉の物語であるとしている。そして作品末尾の〈豚〉となった〈白痴の女〉と共にいる伊沢に、再び〈世間〉の中へと一歩を踏み出していく意志を読んでいる。高尚な〈精神〉を得ようとしていた伊沢が〈肉体〉の象徴である〈白痴の女〉に負け、高尚な〈精神〉のむなしさを抱えたまま〈女〉と共に生きていくという事

だ。それまでの「白痴」論において、〈精神〉によって求められてきた〈明日の希望〉が何であったのか、つまり、〈精神〉が何かを摑む事ができたのか、という点が問題にされていたのに対し、ここでは〈精神〉は敗北したのだと論じられているのである。花田氏以後の「白痴」論は、この〈精神〉の敗北の問題を念頭に置いているといえる。

確かに、作品の最後に〈女〉を連れて〈停車場〉へ向かう伊沢の姿には、〈世間〉の中で生きていく意志が感じ取れる。しかし、それは伊沢の〈精神〉が敗北した故なのだろうか。作品の中で〈理智〉と呼ばれるものは、実は、〈白痴の女〉の〈肉体〉に負けたわけではなく、その形を変化させただけなのではないか。本論では、伊沢の〈理智〉の有り様を追う事で、伊沢の〈理智〉が迎える結末を明確にしていきたい。

2　伊沢を取り巻く〈世間〉

伊沢は、職場では〈時代の流行といふことだけ〉を考える周囲に反発し、路地の住民達に〈想像もしてゐなかつた〉〈荒んだ〉人々を見ている。つまり伊沢にとって〈世間〉とは、容易に入り込めないものであると同時に、溶け込む事を自ら拒んでいる場所である。そして伊沢は、その〈世間〉からの脱却を思い描いている。

では、伊沢が脱却を望む〈世間〉とは、どういった人々で構成されているどういった空間なのだろうか。それをより詳しく考えるために、〈世間〉を伊沢にとっての職場と住処である路地とに分けてみる。

まず、職場についてだが、伊沢は、自らの職業を〈賤業中の賤業〉と考えている。なぜなら同業者達は〈動く時間に乗遅れまいとすることだけが生活であり、自我の追求、個性や独創〉が存在しない世界に生きているからだ。逆に考えれば、伊沢が求めるものとして、彼等が持っていない〈自我の追求〉や〈個性や独創〉をあげる事ができる。彼等は月給のために、〈世間なみの仕事〉をこなし、手に入れた金は、生活と、そして国民酒場での芸術論議に使われる。しかし、この彼等の芸術論は、伊沢にとっては〈ネクタイや上着〉のように表面だけのものである。さて、ここでいう彼等の〈世間なみの仕事〉の内容だが、それは〈退屈無限の映画〉を撮る事である。この映画の内容は、戦争を礼賛し、国民を奮起させる類のものである。だが、そうであっても、結局〈流行〉に捕らわれているだけのこれらの映画は、〈「飛行機をラバウルへ！」〉といっているうちに米軍がラバウルを通り越していく、など、およそ時流に乗っているとは言い難い状態にある。この現実と企画会議との時間差も、伊沢が〈賤業〉と考える理由の一つであるだろう。つまり、彼等が戦争映画を撮るという行為は、一見、時流に乗り現在国が立ち向かっている最も大きな問題である戦争を深く受け止めているようであるが、実はそれすらも受け止め切れていないのである。例えば、戦争が終わり、時の流れが新たな流行を見つけ出せば、彼等は今度は、新たなテーマで映画を撮るであろう。しかし、おそらく同じように、その流れに完全に乗りきる事もできずに、表面だけで、時代の流れの中心にいるふりを続けていくのである。彼等は、そういった生き方、またはそういった仕

事を貫く集団だといえる。

一方、伊沢が職場での仕事を終えて戻る家は、〈人間と豚と犬と雞と家鴨〉が同等に暮らすような場所で、その家がある路地には、様々な人間が住んでいる。例えば、〈相手の分からぬ子供を孕んでゐる〉〈家鴨に似てゐる〉女とその母や、〈真実の兄妹が夫婦の関係を結んでいる〉未亡人などがいる。伊沢は彼らの生き方に〈戦争以来人心が荒んだせゐだらう〉といった理由をつけている。しかし、彼らはそれに対して〈このへんぢや、先からこんなものでしたねえ〉と答える。彼らの言葉が示している通り、路地はいつの時代においてもどんな状況においても、現在と同じような形をとり続けるであろう事が予想できる。

以上のように二つの〈世間〉を比べる事で、まず〈世間〉の共通点が浮かび上がってくる。それは、いつの時代も変わらぬ姿勢を持っているという事である。戦争による被害は、路地にはまだ直接的には無い。そのせいもあってか、〈先からこんなもの〉という言葉からもわかるように、住民達は今現在行われている戦争が、自分達の生活に大きな影響を与えているとは考えていない。一方の職場も、一見戦争と常に向き合っているようだが、それが表面的なものに過ぎない事は先ほども述べた。二つの〈世間〉が身近であるはずの戦争と向き合わない理由には、彼等が自身の周囲の極めて狭い範囲の中で生きているという事があげられる。彼等にとっては、自分が今日一日を生き抜くための食物や金を確保する事が全てなのである。

このように戦争をリアルに受け止めていない〈世間〉のまま時代は流れ、〈明日の東京は廃墟〉だと伊沢は考える。そして、それを覆すべく〈世間〉よりも広い視野を求める。〈世間〉が狭い視野しかもたないのは、伊沢を含め、彼らが日々を〈世間〉の中で生きていかなければならないからである。そのために、彼らは自己が生き抜くための手段や方法を考えていかなければならない。逆に言えば、目前の自己の生き方に捉われないためには、〈世間〉の外部にいなければならず、〈世間〉を構成している日常の送り方からの逸脱が求められるのだ。伊沢は、今目の前に迫っている戦争をこそ、深く見つめる視線を獲得しようとしてみる。だがそういった広い視野は、目の前の一本の煙草によって打ち消される。〈会社を休むとこの煙草がなくなるのだな〉と考えてしまうのだ。このように伊沢は眼前にある事しか見つめられない〈世間〉から、完全に離れる事もできずにいるのである。そして、結局は、その広い視野への〈情熱は死んで〉いる。

上記の二つの〈世間〉は、ひとくくりにして〈常人〉と呼ばれる。そして、それに対応する存在として伊沢の家の裏手には〈気違ひ〉が住む。〈気違ひ〉は、〈世間〉から逸脱している。その理由はいくつかあるが、一つには、〈常人〉であるなら、生きていく上で必ず考えなくてはならない生活するための金銭について、〈資産〉や共に暮らす唯一の〈正気の人間〉の母親がいる事で、思い悩む必要がないという事である。ここからは、〈気違ひ〉は、〈常人〉なら誰もが考えずにはいられない日々の生活を気にかけずに生きているという事がわかる。伊沢が〈気違ひ〉を、〈気違ひ〉だと認識したのは、防空演習での事だ。路地で防空演習が行われている中、それを〈ゲタゲタ笑ひ

ながら見物してゐた〉男が、〈奇妙な声をかけ、水を汲み水を投げ〉る。そしてその後に、〈一場の演説（訓辞）を始め〉ると、伊沢は〈このときに至つて始めて〉、男が〈気違ひ〉だと気付く。〈防空演習〉という訓練に、参加してさえいればそこに〈奇妙な声〉があがろうと、それを〈気違ひ〉とは思わない。ところが、それが〈演説〉という行為に切り替わっただけで、途端に伊沢はそこに〈気違ひ〉という存在を見る。〈防空演習〉は、どのようにして命を守るか、そしてどのようにして今生きている〈世間〉の崩壊を防ぐかを訓練する場である。そんな中で、自らの主義主張を述べている〈気違ひ〉は、ここでもまた、日々の生活を気にかけていないという事がわかる。とはいっても、伊沢が〈気違ひ〉に得難い思想の片鱗を見ているわけではない。この時点での伊沢の〈気違ひ〉への視線は、〈気違いと常人とどこが違っているというのだ〉というものだ。そもそも〈気違ひ〉は、自ら〈世間〉からの逸脱を望んでいるわけではない。むしろ〈世間〉が〈気違ひ〉を除外したといえる。伊沢にとって、そのような形で〈世間〉外と認められる事は本意ではない。伊沢は、自らが〈世間〉を拒絶したいのである。高尚な視点を目指す伊沢にとって強調したいのは、〈世間〉が除外する〈気違ひ〉もしょせん、伊沢が溶け込めない〈世間〉の一部にすぎない事の確認である。つまり、この時点では、伊沢は実際に〈世間〉を逸脱した存在には出会えておらず、伊沢が得ようとしている思想は、実現不可能なのである。

3　〈白痴の女〉との出会い

伊沢の部屋に〈白痴の女〉が現れた事で、伊沢の〈世間〉との関わり方は大きく変化していく。部屋の中に〈白痴の女〉を見つけた伊沢だが、伊沢が〈白痴の女の一夜を保護するといふ眼前の義務〉を念頭に置いている間は、二人に意思の疎通はない。この眼前の義務とは、伊沢が逸脱を望む〈世間〉の基盤の中で、伊沢が尚も守ろうとしているものであり、後に表れてくる〈二百円の悪霊〉となんら変わらないものである。だが、〈白痴の女〉の行動が、そういったものを全く考えにいれず、ただ〈伊沢の愛情を信じ〉て行われていた事だったとわかると、伊沢の〈白痴の女〉への態度も変化する。伊沢は、それまで、コミュニケーションのとれない〈白痴〉という存在に対して、言葉をかけ理屈を語るという方法で接している。これを〈世間〉的な方法と言い換える事は可能だ。つまり、〈世間〉の中に存在するには、言葉を用い、それによって意志の疎通を行えるという事が絶対的な条件となってくるのである。そしてその中で、伊沢には女を保護する義務が生まれた。しかし、〈白痴の女〉が説明のつけようがない自分の好意を信じていたとわかって、〈なまじひに人間らしい分別〉つまり、〈世間〉的な理屈は、〈白痴の女〉と対峙する際には無意味である事を知る。言葉が通じない〈白痴の女〉との間には、理屈を語る事も勿論不可能である。しかし、そこに伊沢は、初めて、〈世間〉外にありながら確かに存在しているもの、つまり、理屈を持たない〈白痴の女〉からの自分への好意を見るのである。そして、そ

れに対して〈女の髪の毛をなで〉る。言葉が通じない関係では、肉体を通してしか〈小さな愛情〉を表現する事ができない。そして自分には〈この白痴のやうな心〉が〈何より必要〉だった事を忘れ、〈あくせくした人間共の思考の中でうすぎたなく汚れ、虚妄の影を追〉っていたとしている。ここでの〈虚妄の影〉が、伊沢の到達しようとしている広い視野だとすると、それを追う事に、無意味さを感じている事がわかる。つまり、伊沢は、自分が認めない〈世間〉からさえも認められていない〈白痴〉の中に、言葉とは無縁の世界、つまり一つの〈世間〉からの逸脱の形を見たのではないだろうか。それは、伊沢が理想とした広い視野とは別の世界であり、全く新しい世界である。〈白痴〉の女の存在は、その世界の体現だったのではないか。

先ほど、伊沢にとって〈世間〉と〈気違ひ〉が結局同じものとされていると述べたが、この理由も言葉と関わってくる。ここで、言葉を意識する事によって浮かび上がる〈世間〉と〈気違ひ〉の差異についてもふれておく。それは、それぞれの実体と言葉との距離の違いである。路地の人間の言葉は、たとえば、服毒自殺をした娘の死を、心臓麻痺と偽ったり、表向軍需工場の寮であるところに、戦時夫人を住まわせているなど、何かしらのごまかしや偽りを構成している。また、職場の人間も、〈架空の文章に憂身をやつし〉ている。そうすることで、彼らは、〈世間〉内で円滑に生きていく事ができる。もしも彼らが実体そのものを語れば彼らの生活は崩壊するだろう。取り繕った言葉は彼らの生きる術であり、金や日常生活と密着した生の形なのである。一方演説をする〈気違ひ〉の言葉は、何かを取り繕ったり偽ったりするためのものではない。言葉を用いているという事自体は、〈気違ひ〉を〈世間〉の枠組みの中から排除しないし、おそらくその言葉が彼の実体そのものを現しているわけではないという事も共通である。しかし〈気違ひ〉の言葉はそこに何の役目ももたせない。そのせいで〈世間〉は〈気違ひ〉をはじくのだといえる。

伊沢の理想としてきた言葉は、実体と合致した真実の言葉だ。だがそれは〈虚妄〉であり、言葉そのものを失った場所に伊沢は新しい世界を見たのだ。

〈白痴〉の女の髪をなでながらの伊沢は、様々な事柄に対して思いを巡らす。それは、まず戦争という大きな問題に始まり、その次に、〈二百円ほどの給料〉という〈卑小な問題〉へ。そして、再び戦争に戻ると、その戦争によって全ては破壊され、その先にある〈新鮮な再生〉へ。〈新鮮な再生〉は、女への欲求という伊沢の〈最大の希望〉へ直結する。そして、その夢は、再び卑小な〈二百円〉へと戻る。〈二百円〉へ戻った伊沢は、それを打ち砕く〈偉大なる破壊〉である戦争を求め、空襲警報を待つ事が〈生命の不安と遊ぶこと〉であり、それこそが生きがいであると考える。

伊沢の思想が、何故〈新鮮な再生〉を越え、最終的に〈生命の不安と遊ぶこと〉に行き着いてしまうかといえば、〈新鮮な再生〉が具体的に何を指すか伊沢自身にも理解しきれていない事にある。そしてもう一つに、今までの伊沢にとっての女というものの存在がある。今までの女とは、新たな世界への糸口であると同時に、〈世間〉が持つ最も狭小な視野と結びついてい

る。だが、その女が、〈白痴〉の女に変化する事で、伊沢は、ある程度の疑いを持ちながらも、〈無限の旅路〉を思い描く事ができる。

では、一般的な女と〈白痴の女〉とにはどんな差異があるのか。伊沢の住む路地の女達を見ればわかるように、彼女達が女性であるという事は、彼女達が金を手に入れるための手段と、深く結びついている。つまり、彼女達を形作る肉体そのものが既に、狭い眼前の生活しか見つめられない原因となっており、彼女達は、伊沢にとっては、狭い視野から逃れられない存在なのである。また、〈淫売婦〉ではない女性であったとしても、〈世間〉の中で共に生きる以上、〈鍋だの釜だの味噌だの米だの〉が必要であり、そのためには金が必要不可欠となってしまう。それに比べて〈白痴〉は、〈最も薄い一枚のガラスのやうに喜怒哀楽の微風にすら反響し、放心と怯えの皺の間へ人の意志を受け入れ通過させてゐるだけ〉の〈人形〉である。手段や方法の一部となる肉体ではなく、それらを介さない肉体、つまりより直接的な、性と生がある。そこには、〈二百円の悪霊〉も宿らない。とすれば、伊沢の思想も、〈白痴の女〉から、〈二百円〉へ導かれる事はない。〈白痴の女〉は、〈新鮮な再生〉とイコールになり、それが、伊沢の思想の到達点である。つまり、伊沢にとって〈白痴の女〉は、新たな世界そのものであると共に、そこに生きるという事がどういう事なのか、そこに生きる自分の姿をも想起させる存在だったのである。〈白痴の女〉によって、伊沢は擬似的に〈偉大なる破壊〉の後に残されたものを体験したのではないか。

だが、それが、〈配給の行列に立つてゐるのが精一杯〉の、〈世間〉並の事すらも容易にこなせないものであったという事は、〈世間〉以上の高尚さを求める事を捨てきれない伊沢にとっては、〈馬鹿げたこと〉にも思われてもいる。

4　伊沢と〈白痴の女〉との生活

〈白痴の女〉の存在によって、伊沢の部屋は〈世間〉とは異なる空間になったといえるだろう。それは伊沢の求めていた世界が具現化された形である。しかし、それでも伊沢はその部屋にこもり、具現化された理想にのめりこむ事はできない。伊沢はやはり一歩部屋を出、会社へと向かうのである。とすれば、〈白痴の女〉はこの時点ではまだ、〈世間〉から完全に伊沢を引き剝がしてくれる存在とは呼べない。伊沢は、部屋から〈一足でると、もう白痴の女のことなどは忘れて〉いる。そして、それにとってかわり伊沢の目の前に現れるのが戦争なのである。その中では〈白痴の顔〉は、破壊された〈雑多のカケラ〉の中に〈ころがつてゐるだけ〉だ。

女との生活が始まって以降、警戒警報は伊沢にとって以前とは別の意味を持ち始める。伊沢は警報によって〈女がとりみだして、飛びだしてすべてが近隣へ知れ渡っていないかという不安〉を持つようになったのである。伊沢は〈自分の本質が低俗な世間なみ〉である事を思い知らされる。それまで、警報は伊沢にとって〈生命の不安と遊ぶ〉生きがいだった。これは、何かにとっての道具となり得る肉体や、その肉体を維持するための金といった捉え方を迫られている〈世間〉の中での生ではな

く、より直接的な生を感じさせるたった一つの手段だった。それは〈世間〉にあっては決して感じる事のできないもので、〈世間〉からの逸脱を望む伊沢の願いが達成されていた瞬間でもある。だが、ここでの警報は、むしろ伊沢が〈世間〉をどれほど気にかけているのかを証明するものになっている。伊沢は、〈世間〉からの逸脱を強く望み、〈世間〉の生き方を非難しつつも、〈世間〉で生きていかなければならない自分も意識している。〈白痴の女〉と伊沢が共に暮らしていると知っても路地の住人達は、別段驚きはしないだろう。それは彼らにとって日常茶飯事な出来事の一つである。むしろ伊沢自身がその発覚をおそれている。それは〈世間〉から排除されている〈白痴の女〉と自分が共に生きる姿を、自らが見下す〈世間〉に見られたくないからであり、それこそが伊沢に残った見栄、つまり彼もまた〈世間〉の一部である証拠なのである。伊沢は〈白痴の女〉を得た事で、新たな世界を垣間見ると同時に、伊沢自身が〈世間〉に執着している事にも気付かされてしまったのである。

伊沢は、新たな世界を求めている。しかし、そこに辿り着くためには、現存する〈世間〉を脱却するだけではなく、それが〈破壊〉されなければならないといえるだろう。そして、その破壊はいまだ伊沢の生活に直結してはいない。伊沢が、自分にまとわりつく〈二百円〉を破壊してくれるものの存在を求めるとすれば、それが無くなるには、伊沢の接している〈世間〉が崩壊するしかない。そして〈世間〉の崩壊とは、前述した、実体と言葉との乖離を認め、そうする事で生活を補償される仕組みを作った根本、つまり日本という国自体が崩壊する事でしか叶えられず、起こり得るとするならば戦争によって、なのである。

伊沢は、このような〈世間〉に蔓延する、生き抜く術として使われる言葉を嫌悪している。伊沢が望むのは、実体そのものの真実の言葉だからだ。言葉のない〈白痴の女〉との世界は、確かに新たな世界ではあったが、言葉そのものが無くなってしまう事は必ずしも伊沢が求めたものではない。つまり、伊沢は、たとえ実体とかけ離れた言葉であろうとも、言葉そのものから完全に離れる事もできずにいるのである。そしてそうある事は〈理智〉とつながってくる。〈理智〉は〈白痴の女〉の表情で、伊沢が忘れられない二つの顔に関連する。一つは、伊沢が〈始めて白痴の肉体にふれた〉時の顔である。〈白痴の女〉は、それ以降、〈たゞ待ちまうけてゐる肉体〉にすぎず、伊沢が触れた時にだけ反応を示す。〈在るものはたゞ魂の昏睡と、そして生きている肉体のみ〉とあるように、白痴の女は、伊沢に触れられる事で目覚め、それ以外の時間を〈待ちまうけ〉て過ごす、つまり、眠っていると同じ状態で過ごしている。ここからは、〈白痴の女〉が伊沢無しで生きるという事がないといえる。前述したように、〈白痴の女〉の肉体は、手段化されない肉体であり、そこには直接的な生がある。従って伊沢もまた、〈白痴の女〉と共に過ごす部屋の中に、直接的な生を感じ、それは、伊沢が求めていた〈世間〉からの逸脱と結びついている。ここに伊沢の〈白痴の女〉との連帯感が生まれる。しかし、〈白痴の女〉はおそらく伊沢と同様に連帯感を感じていたわけではない。この連帯感自体が伊沢の思いこみによるものなのである。

そしてその事は、爆撃の中で〈死の窓へひらかれた恐怖と苦悶〉の表情により明らかになる。伊沢はこの顔に〈醜悪〉さを見る。そして〈理智〉がない人間が〈あさましい〉と感じる。では、ここでの〈理智〉とはどういった意味だろうか。伊沢は、その〈あさましさ〉について二つの例を挙げる。一つは犬が涙を流す事で、それを〈醜怪〉という。もう一つは爆撃の中の子供が〈情意を静かに殺している〉様子で、これは〈大人よりも理智的にすら見える〉という。これらの伊沢の考えは、一見矛盾している。死を恐怖するのは、死を意識しているからで、死を怖れている〈白痴の女〉には、死を怖れるだけの〈理智〉があると考えるのが妥当だからである。しかし、伊沢はそうは思わない。ここで注目したいのは、〈白痴の女〉が涙を流した際に、〈苦悶が一滴の涙を落してゐる〉と語られている事だ。この時、〈白痴の女〉は〈苦悶〉という感情と同一、もしくはそれに支配される形になっている。つまり、〈本能的な死への恐怖と死への苦悶〉ともあるように、伊沢はこの時、〈白痴の女〉の中に、ただ肉体の消失のみを怖れる肉体自身から生まれる〈苦悶〉を見たのだ。そうなると、犬の涙が醜悪なのは、〈理智〉とは無関係にその本能によって肉体から流れ出たからで、また、子供が〈理智的〉なのは、その〈情意を殺す〉様が、本能を押し殺している〈理智〉を思わせるからだといえる。

〈理智〉に勝ってしまった本能は、〈絶対の孤独〉をも味わわせる。そこには伊沢が嫌悪していた、極めて狭い視野である自己の生への固執が見えるからである。この〈死への苦悶〉はおそらく伊沢が触れる事以外に〈白痴の女〉が、その肉体を目覚めさせられたたった一つの瞬間だったといえる。つまり、〈白痴の女〉の肉体は、外部から受けた生、もしくは死へ直結した刺激に対し反応をしただけだったのである。それは、本能の反応とも言い換えられるだろう。伊沢にとって女との一体感によってのみ感じてきた直接的な生は、女にとっては外部からの死を思わせる刺激も、他者との一体感による生も同様であり、女に他者は必要なかった。それがわかった時、伊沢自身が〈絶対の孤独〉を感じ、これこそが、伊沢と〈白痴の女〉との決定的な断絶となる。そして、伊沢の目に映る〈白痴の女〉は、〈むくろ〉となりはて、〈暗い、暗い。無限の落下〉が残る。無限の可能性を秘めていたように感じられていた〈白痴の女〉も、生と死を前にしてはなすすべもないただの〈人形〉に過ぎない。伊沢は、〈白痴の女〉と共にいる意味を失い、その存在の破壊を、戦争に託して待つ事になる。

5　四月十五日

伊沢は、戦争が女を殺す事を待ち望む。そんな中で、伊沢の住む路地に空襲が起こる。伊沢は、自分より先に逃げていく仕立屋達には〈芸人だから、命のとことんの所で自分の姿を見凝め得る〉機会を得たと話しているが、本心では、白痴の姿を見られないように逃げ出したいという思いを持っている。ここには伊沢が掲げた新しい世界への希望や高尚な芸術論はなく、ただ、今まで伊沢が嫌悪し続けた実体と乖離した取り繕われた言葉があるだけである。これは〈世間の見栄〉を棄てられずに〈世間〉に固執する事であり、伊沢が拒んでいたはずの〈世

間〉の中に留まろうとしている証拠なのである。

この〈見栄〉が隠したものは、死への恐怖感である。死を恐怖する〈白痴の女〉の姿は、伊沢にとって醜悪なものであった。四月十五日の空襲は、伊沢に強い恐怖を与えているから、ここで伊沢自身が遂に恐怖を抑えられなくなる事も充分にあり得たといえる。そんな中で、伊沢は、その恐怖を抑える事に成功している。しかし、それを押しとどめたものとは〈世間の見栄〉にほかならなかった。つまり伊沢が醜悪にならずに済んだ理由、〈理智〉を保ち続けられた理由が〈世間〉によるものだったといえるのである。

作品内では、伊沢自身が、その理智を支えるものが〈世間の見栄〉であったと認識する事はない。しかし、作品冒頭から繰り返し見下されてきた〈世間〉が、最も高尚なものであったはずの〈理智〉の基盤にあるという事が明らかになるこの場面は、作品にとって最も重要な点であるといえる。

伊沢は空襲の中から〈白痴の女〉を救い出すが、それから路地を抜けるまでの間は〈全然夢中で分らなかつた〉とされている。生きるか、〈白痴の女〉を見られないように〈見栄〉を守るか、その両者の間で悶えていた伊沢は、両者をまとめて受け入れる事ができたのである。つまり、空襲によって〈これまでの世間〉の破壊が遂に起こり、伊沢は〈白痴の女〉と生きていく〈新たな世間〉を獲得しようとしているのである。これこそが、〈世間〉を選んでしまった伊沢に与えられた作品の救いであるともいえるだろう。それまでの伊沢が知っている〈世間〉の形自体は崩壊の兆しを見せている。伊沢は、遂に、戦争によって破壊された〈世間〉を実感している。この後に待つものは伊沢の目指した新たな世界である。その中では、白痴と伊沢はコミュニケーションを取ることも容易である。伊沢が二人で生きていく事を決意した世界では、伊沢と〈白痴の女〉は一組の男女として生きていく事になる。そのため〈俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ〉という伊沢に女が〈始めての意志を〉表す事も可能になったのではないか。

だが、その世界も、炎を逃れ、生きている事が確信できた時点で、途端に魅力を失ってしまう。そこには〈得体の知れない大きな疲れと、涯しれぬ虚無〉が、まず現れる。どのようにして生きていけばいいのか、という問題が伊沢にふりかかるのだ。そうなれば、食べ物を得ねばならず、そのためには金が必要になる、という、作品前半に伊沢が逸脱したかった〈世間〉の法則がまた浮かび上がってくるのである。今までいた〈世間〉は崩れても、人々が集まり生活していく以上、今までと大して変わらない〈世間〉が再び形成されてゆく事になるのだ。そして、そうなった時、一時、女と交わし得た会話は、〈小さな安堵〉としてしか残らず、むしろそれは〈ケチくさい、馬鹿げたもの〉になってしまうのではないだろうか。伊沢と〈白痴の女〉は、空襲によって崩壊していく〈世間〉と、そこから再び作り上げられていく〈世間〉との狭間で、極めて直接的な生を、瞬間、共にした。しかし、それは、やはり、瞬間だったのである。

作品に描かれる伊沢の〈理智〉は、当初は〈世間〉からの逸脱を望む理由であったはずである。伊沢に、〈世間〉が持たない〈理智〉があるからこそ、伊沢はその中で生きる事を拒み、

そこからの脱却を思い描いていた。しかし、伊沢の目の前に〈世間〉と切り離されて現れてくるものは、〈理智〉よりもむしろ極めて肉体的なものであった。そして、その肉体の前では、伊沢の〈理智〉はむしろ限りなく〈世間〉に近い。伊沢はそれに気づき、いったんは落胆する。

しかし、その肉体自身が持つ死への恐怖は醜く、伊沢はやはりそれを押しとどめるものが〈理智〉だと考える。だが、いざ、伊沢自身にその恐怖が訪れた時、それを押しとどめるべき〈理智〉とは、伊沢が嫌悪していたはずの〈世間〉だったのである。

この後に二人の前に現れる〈世間〉は、〈これまでの世間〉そのものではない。〈これまでの世間〉は、伊沢が望んだように戦争によって崩壊する。しかし、結局、この後に生まれる新たな世界も今までの〈世間〉と大差ないものである事を伊沢は承知している。

作品の最後で、〈白痴の女〉は饒舌になり、言葉を話し始める。ここで、〈白痴の女〉は、新たな〈世間〉に組み込まれようとしている事がうかがえる。そしてまた、その女と共に生きる事を選んだ伊沢も同様に、代わり映えはしないかもしれないが、新しい〈世間〉の中に取り込まれる事になる。伊沢が女を豚に例える事は、人間も動物も同等に暮らす〈世間〉の中で生きる女達と〈白痴の女〉が同様になった事の象徴だといえるが、それでも伊沢は、〈白痴の女〉を離そうとはしない。〈捨ててみても〉希望がないのなら、連れて行けばいい、という消去法ではあるが、伊沢は、女を手元に置いている。それは、新しい、しかし変わり映えのしない〈世間〉の中で、豚と成り果てた一人の女と、共に生きようとする決意の姿である。

伊沢の理想としていた〈理智〉は、結局、〈世間〉からの脱却により手に入るものではなく、むしろ〈世間〉と切り離しては有り得ないものであった。であれば、そこで生きようとする伊沢の決意とは、〈世間〉にある〈理智〉を自分が望み続けていた〈理智〉だと認め、それを持ち続ける事の決意にほかならないのである。

注1　「国文学　解釈と鑑賞」（昭和四十三年十二月号）において、
「白痴」は、その方法叙説と目すべき、「堕落論」を、肉化された思想として形象化した、坂口文学の代表作である。
と紹介されている。

2　「坂口安吾研究1」（昭和四十七年　冬樹社）

3　「坂口安吾研究講座II」（昭和六十年　三弥井書店）

（本学大学院博士課程）